

石川啄木試論

—郷里の意義と影響—

長崎 紘明

石川啄木の文学活動は17歳に始って、27歳で終る。「郷里」の自然と人々は啄木の意識をゆるがす最も大きなエネルギーであり、啄木自身が「内部生命の全てである」と書いている。石川啄木の詩は、100年前の明治時代の青年の意識—感情と思索を現代に伝えている。「郷里」は甘美な自然と人々であるとともに、父を住職の寺から追い出した人々のいる悲しみの記憶でもある。

キーワード：石川啄木, 郷里, 意識表現法

1 はじめに

石川啄木の文学的活動は17才に始まり27才で終わる。この10年間の活動は、全身全霊を打ち込んだものであり、明治の青年の意識をはるかに現代に伝えるものである。石川啄木の詩作は明治時代後期の日本社会が表現され、日本人の心情が吐露されている。そこに石川啄木が思索するプロセスが画かれている。本項では明治時代後期の石川啄木と対話するように、啄木の日記と詩作から、啄木の意識を再現し、啄木の意識を想像してみる。もし啄木が生存していれば101才である。啄木と同世代の人も現存しているのだから、はるかな明治の意識を現代に再現する意義は大きい。

最初に啄木22才の時の作品集「一握の砂」¹⁾—この作品集で「三行の和歌」という啄木独特の表現方法を発表した。

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

かにかくに浜民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

ふるさとの訛なつかし

停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三步あゆまず

ここに表現されているのは望郷の情念である。胸がいっぱいになって、涙があふれる心情である。郷里を離れて暮す人々は、一度は味わう気持である。異郷の人々や異郷での暮らしの中で感じる望郷の情念は、郷里の山、川、訛、母を回顧している。

田も畑も売りて酒のみ
ほろびゆくふるさとの人に
心寄する日

あはれかの我の教へし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づらむ

ふるさとを出で来し子等の
相会ひて
よろこびにまさるかなしみはなし

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

その名さへ忘れし頃
飄然とふるさとに来て
咳せし男

意地悪の大工の子などもかなしかり
戦に出でしが
生きてかへらず

友われに飯を与へき
その友に背きし我の
性のかなしさ

こころざし得ぬ人人の
あつまりて酒のむ場所が
我が家なりしか

郷里を出ることは当然のような村の教え子達への同情。戦死したいぢめっ子、酒のみで田畑を売って亡びる人。病いを得て、忘れられた頃郷里に戻ってくる人など、郷里があるけれども、郷里で一生を暮らすことが出来ない人人の無念さや、かなしみへの同情があふれている。

一隊の兵を見送りて
かなしかり
何ぞ彼等のうれひ無げなる

誰そ我に
ピストルにても撃てよかし
伊藤のごとく死にて見せなむ

やとばかり
桂首相に手をとられし夢みて覚めぬ
秋の夜の二時

平手もて
吹雪にぬれし顔を拭く
友共産を主義とせりけり

赤紙の表紙手擦れし
国禁の
書を行李の底にさがす日

暗殺された伊藤博文首相をわが身に置きかえてみる。桂太郎首相に手をとられる夢。国禁の書を読む日。共産主義の友の心境などに思いを至す。これらは社会的な関心、政治的意識や熱情がほとぼしる。

次に死を見つめる詩がある。自棄的な言葉として“死”と言っているので読むものにはやりきれない気分させられる。

怒る時
かならずひとつ鉢を割り

九百九十九割りて死なまし

死ぬことを
持薬をのむがごとくにも我はおもへり
心いためば

剽軽の性なりし友の死顔
青き疲れが
いまも目にあり

死ね死ねと己を怒り
もだしたる
心の底の暗きむなしさ

「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答

よく笑ふ若き男の
死にたらば
すこしはこの世のさびしくもなれ

我に似し友の二人よ
一人は死に
一人は牢を出でて今病む

死にたくてならぬ時あり
はばかりに人目を避けて
怖き顔する

これらの詩は石川啄木が北海道時代のものである。人間にとって「故郷」がいかに強力な意義をもっているかを表現している。意識を構成する要素として、「故郷」を持ち、意識を表現する言葉として「故郷」を用いた。時代に語りかける「評論」とは別に、時代の人々に向かって語りかける「表現法」を発見した。ここに至るまでの試行について次に考察する。

II 啄木少年の決意

石川啄木の日記は明治35年、啄木17才の時に初まる。日記は作品として意識されている。つまり、啄木が文学者として、自ら出発した決意がみなぎっている。日記は「秋籟笛語—白蘋日録」²⁾と題してある。白蘋は最初のペンネームである。

……序。運命の神は常に天外より落ち来って人生の進路を左右す。我もこの度其無辺際の際に乗りて自らが記し行く鋼鉄上の伝記の道に一展開を示せり。

惟ふに人の人として値あるは其宇宙的存在の価値を自覚するに帰因する。人類天賦の使命は、かの諸實在則の範に屈従し又は自ら造れる社会のために左右されるが如き盲目的薄弱の者に非らず。宜しく自己の信念に精進して、大宇宙に合体すべく心霊の十全なる発露を遂ぐべき也。……

呱呱の声をあげてより十有七年。父母の膝下を辞して杜陵の空に学ぶこと八星霜。前途未だ漠として浮雲に入る。この秋流転の水流に従って校を辞し友とわかれ双親とはなれ故山を去り恋ふ子の美しき面影とさへわかれて孤影飄然東都に出ず。嗟乎、何人かよく遊子胸奥の天絃に知音たる者ぞ。

秋韻笛録はこの旅出の日より起したる日誌なり。

裂かば花に、碎かば琴の夢追ふ子追ふて旅する命の秋よ。

天琴に誰かよき音の幸ならむ秋掩ふ雲にわかれて去ぬる。

白蘋詩堂

明治三十五年秋

装ひては花の香による蝶の羽秋は韻れの笛によるしき。

明治35年、石川^{はじめ}一は盛岡中学の5年生である。岩手県唯一の中学である。全県の秀才が集っていた。石川一は4年生の頃から雑誌「明星」の新体詩に熱中したようで、出席と成績が悪くなる。5年前期の試験で友人に頼み数学のカンニングを敢行する。発見されて、処分保留となる。その友人に罪が及ぶのをおそれて、自ら責任を取るという意識で退学願いを出す。

石川一の実家は岩手郡浪民村の万年山宝徳寺である。万年山宝徳寺は、春夏秋冬、四季の推移はきわだって美しかった。少年一は野山を駆けめぐり、四季の果実を味わい感受性豊かに育つ³⁾。住職の父石川一禎は浪民村の尋常小学校を終えた長男一を盛岡へ遊学させる。一は盛岡高等小学校を経て盛岡中学へ進学した。

したがって石川一の退学、上京というのは石川一禎にとっても大事件であった。しかし、貧しい寺の経済にもかかわらず、父一禎は上京の資金を捻出する³⁾。父一禎は一家の命運を長男に託す決意を定めた。その結果、宝徳寺の経済は急速に悪化して数年後には、石川一禎は住職を辞して一家は離散し、糊口に困ることになるのだが。啄木の日記にもどる。

十月卅日

朝。故山は今搖落の秋あはただしう枯葉の音に埋もれつつあり。霜凋の野草を踏み沓瀝の風に咽んで九時故家の鬨を出づ。愛妹と双親とに涙なき涙にわかれて老僕元吉は好摩ステーションまで従へたり。

かくて我が進路は開きぬ。かくして我は希望の影を探

らむとす。記憶すべき門出よ。雲は高くして巖峯の嶺に浮び秋装悲みをこめて故郷の山水歩々にして相へだたる。ああこの離別の情、浮雲ねがはくは天日を掩ふ勿れよ。遊子自ら胸をうてば天絃惆悵として腔奥響きかすか也。

南行して盛岡に下車し仁王の僑居に入る。午後。朱絃藻外を訪ひ阿部兄とも談じたり。下の橋写真館にて岡山残紅兄と撮影しそれより共に片袖庵に蒼梧氏を訪ふ「透谷全集」を贈らる。……青春の望みに憧るる者は幸いなる哉。萬づの勇と力皆これより生ず。吟身愁ひを知る者は聖なる哉。粉絃の胸中自ら清高の香あり。ああ高き者よ、汝の座は天上に設けられたり。昨夜よりのつかれにて杜陵城下の終りの一夜を安らかに温かに眠りぬ。

若き我にふるべき鞭のつよき神韻れゆくを笛によみやす。

神を仰ぎ道なる花にはぐれきよ何地向きてぞ我れ歩むべき。

万年山宝徳寺は晩秋の気配をみせ、啄木は朝九時に家族と別れを告げて、好摩の駅に行く。盛岡で下車して友人たちを訪ね歩く。互いに雅号で呼び合っていたらしい。

大井蒼梧、金矢朱絃、瀬川藻外(のちに京大医学部へ)、岡山残紅、阿部修一郎、伊藤圭一郎(後に朝日新聞)、小野弘吉、小澤恒一など文学と英語の勉強会(ユニオン会と称した)の仲間達である。

十月卅一日

午前。湧くなる我血汐もかくては遂に溢れなん。別れなればの涙にわが恋しの君訪ね玉ひぬ。まことに今日のみならじ。……東都の春の楽の音に共に目さめむもここ六ヶ月のうち。ああさらば胸の轟きしづめて殯の身の、世の大波に暫くはひとり南せんか。……五時行李を整へ車を走せて海沼の伯母や姉等にわかれ停車場に至れば見送りの友人はすでにあり。……五十五分、我はあはただしう友と別れの言を交はしぬ。汽笛一声、車は南に向ってなつかしき杜陵の地をはなれぬ。……

夜の空しめやかなるに想ひの車轟きて窓によれる我胸狂乱の嵐に乱れぬ。

当時、堀合節子との恋愛がすすんでいた。日記には6ヶ月のうちに東京で一緒になるつもりでいることが書いてある。盛岡駅では友人たちとともに、人目をさけるように柱の陰から見送る堀合節子姉妹の姿があった。

上京した啄木は細越夏村の世話で下宿をさがし、家具を整え、与謝野鉄幹に会い、雑誌「明星」の同人になるのを待つ。友人や恋人、家族に手紙を書いたり、上野の

展覧会に行ったり、東京の中学に編入学するためにあちこちに問い合わせたりしながら一週間ほどで100首近い歌を作っている。

十一月七日

……今日はそのまぢし新詩社小集の日也。一時夏村兄と携へて会場に至れば、鉄幹氏を初め諸氏、すでにあり。……七時散会。吾は惟ふ。人が我心をはなれて互いに詩腸をかたむけて歎語する時、集りの最も聖なる者也と。都は国中活動の中心なる故万事活発々地の趣きあり。かの文芸の士の一室に閑居して筆を弄し、閑隠三昧に独り楽しめる時代はすでに去りて。如何なる者も社会の一員として大なる奮斗を経ざるべからずなれり。人の値は大なる戦ひに雄々しく勝ちもしくは雄々しく敗くる時に定まる。

十一月九日

……書食を了へ、渋谷の詩堂を訪はんとて出づ。……先ず晶子女史の清高なる気品に接し座にまつこと少許にして鉄幹氏完爾として入り来る。……氏曰く、文芸の士はその文や詩をうりて食するはいさぎよき事に非ず、由来詩は理想界の事也直ちに現実界の材領たるべからずと。又云ふ、和歌も一詩形には相異なけれども今後の詩人はよろしく新体詩上の新開拓をなさざるべからずと。又云ふ、人は大なるたかひに逢ひて百方面の煩雑なる事條に通じ雄々しく勝ち雄々しく敗けて後初めて値ある詩人たるべし、と。又云ふ、君の歌は奔放にすぐと。又云ふ、日本の詩人は虚名をうらんとする故にその名の一度上るや再び落ちんことを恐れて又作らず。我らが友に於て皆然り、と。……

啄木が上京した目的は東京の文壇にデビューすることであった。すでに盛岡中学時代に雑誌明星を読み与謝野晶子の歌には強い影響を受けている。鉄幹との面会後に詳細に鉄幹の言知を書きとめている。

また斎藤秀三郎の正則英語学校の高等受験科に入るための準備をはじめ。シェークスピア、バイロン、ロングフェロー、ワーズワース、トリルビー、モンゴメリーなどを英文で読む日々が続く。詩が多いようだ。イブセンの“死せる人”を訳出して出版するつもりでいた。ところが健康を害して大変なホームシックになる。

十一月卅日

朝めさむれば、枕頭に匂ふ白百合のみ姿あり、せつ子の君杜陵より新らしき写真たまひぬ。……吾ははしなくも杜陵の地にかへらんことを祈りぬ。……

十二月一日

郷を去って月一度めぐりぬ。満都風寒し。旅情自らこまやか也。ああ汝故郷よ、岩峯の銀衣、玉東の白袖、夫れ依然として旧態の美あるか。……郷村不断の自然の霊、今尚ほ、清秀の趣きを湛へて、初冬の瀬気、朴直の農人の胸に呼吸せらるか。吾たへずああ吾堪へず。……

十二月十九日

日記の筆を断つこと茲に十六日、その間殆んど回顧の涙と俗事の繁忙とにすぐしたり。

明治35年の日記はこれで終る。この間、後世に残るような作品は何もない。健康を害して病床に伏す。明星の同人たちも詩作では収入がない状況だったので、経済的には極貧の状況であった。仕送りが1度あるが、英文の書や訳書を買っている。“俗事の繁忙にすぐしたり”とあるのは、金策に駆け周ったか、イブセンの訳出を出版するために駆け周ったか、そんな所と推定できる。17才の少年、啄木は行き詰まる。現情を長文の手紙にしたためて宝徳寺の父一禎に助けを求める。一禎は檀家の許可も得ずに寺の栗の木を伐採して金にかえて上京する³⁾。一禎と啄木が浜民村に帰ったのは翌年の2月17日であった。この明治36年は病身と失意のうちに過したようだ。年譜によると啄木は「ワグネルの思想を論ず」と題して岩手日報紙上に白蘋の署名で10回連載した。また明星に短歌を発表し、東京新詩社の同人となっている。

III 郷里とは

明治37年、啄木庵日誌⁴⁾として日記が再開する。

一月一日

年はまた新しくなれり。手に希望と栄光との花束を携へて新世の幸なす初日の光は眩ゆく地上に舞い来れり。かくて我は十有九才の源頭に立ちぬ。如何にして過ぎ来しや、如何にして過ぎ去らんとするや、こは我今語るべき事に非ず。我はただ十八年の歳月を暗中に葬り去りて、更に悠久なる希望の未来に対せるを知る。

一月八日

朝早く起きて、せつ子の君が許へ手紙をかき、車夫に托して直ちに阿兄が寓を訪ふ。田鎖徹郎君も来り合せ、十一時頃遺族諸君親戚の人々と共に梅子君が遺骨を奉じて市外龍谷寺に至る。門を入れば、せつ子、妹たか子さんと共にすでにあり、瀬川、村井の諸友も会葬す。……

我はこの日の感懐をここに記すの愚をなさざる可し。何となれば、これ胸深く刻まれる涙痕にして終生忘れることなきを思へばなり。

年譜によると、この頃堀合せつ子との婚約、結納が整う。「明星」への発表や岩手日報への連載が続く。10月に処女詩集「あこがれ」出版のため上京し、友人宅などに滞在。12月26日、父石川一禎が宗費滞納ゆえに住職罷免となる。翌明治38年(啄木20才)の5月に「あこがれ」を刊行。

阿部修一郎の姉梅子の死により、阿部修一郎は妹まつ子と2人だけの家族になってしまう。堀合せつ子は啄木の長姉の嫁ぎ先田村叶の近所に住んでいた。啄木は中学時代、長姉の家の下宿したので、そこで知り合った。田村の姉は堀合節子との婚約に努力してくれていた。

明治三十九年。……浜民日記⁹⁾(21才)

三月四日

九ヶ月の杜陵生活は昨日に終りを告げて、なつかしき故山浜民村における我新生涯はこの日から始まる。

浜民は、家並百戸にも満たぬ、極く不便な、共に詩を談ずる友の殆んど無い、自然の風致の優れた外には何一つ取柄のない野人の巢で、みちのくの廣野の中の寒村である。我が一家の比度の転居は、企てた洋行の、旅券も下付成らぬうちから、中止せねばならぬ運命に立至った事や、田舎で徴兵検査を受けたい為や、又生活の苦闘の中に長く家族を忍ばしめる事の堪えられなかった為や、閑地に隠れて存分筆を取りたかった為や、種々の原因のある事であるが、新佳地として何故にこの僻陬を撰んだか。それは一言にして盡きる。曰く、浜民村は我が故郷一幾萬万里のこの地球上で、最も自分と関係深い故郷であるからだ。「故郷」の一語に含む甘美比ひなき魔力が、今迄、長く、深く、強く、常に自分の心の磁石を司配して居たからだ。愛と詩と煩悶と自負と涙と、及び故郷と、これは実に今迄の、又現在の、自分の内的生活の全部ではないか。或は人は人間到所青山あり、心ある青年は故郷の天地にのみ恋着すべきでないといふかもしれぬが、さり乍ら、詩人たる自分の学ぶべき大学が、塵の都のいかめしい大建築であるとは思へない。故郷は、いはば、神が特別の恩寵を以て自分の為に建てられた自然の大殿堂である。忘れもせぬ一年の前、自分が東都の空にさまようていた頃、はからずも両親がこの浜民を見捨てねばならぬ運命になってからといふもの、自分は如何に幾度あたたかい涙を以てこれを悲しんだか。故郷は実に無限の魔力を以て我が全心をひき付けて居たのである。春は春、秋は秋、年々に変りなき四季のめぐりを迎ふるにつけ、事々に思ひ出しては物狂ほしいまで一家浜民の話

に夜の更くるをも忘れたものであった。……

21才の啄木にとって試練の日々が続く。万年山宝徳寺への復帰のため、岩手県の曹洞宗宗務院へ嘆願書を出していたところ、父一禎の懲戒を特赦する旨の知らせが来る。父子は檀家に対しても宝徳寺への復帰を願うが、檀家も2派に別れて紛争になり、宝徳寺への復帰はできない状態になった。

しかし3月4日の日記にあるように、啄木は浜民村こそ神に自分に与えてくれた「故郷」であること、自分の作詩を学ぶ大殿堂であること、東京にいて、いかに浜民村がなつかしく思い出されたことかなど「故郷」こそ、自分の内部生活の全部であると言っている。

悲しみは続く、2月25日、秋田県に移転した長姉田村さだが死亡する。この姉が盛岡にいた頃、そこに下宿していたし、堀合節子との婚約に努力してくれたのも、2人の逢引きの場所を提供してくれたのも、この姉であった。

啄木はこの年、浜民村の小学校の代用教員に採用される。浜民村での生活は堀合節子と妹光子、母かつの4人で始まった。父一禎は青森県野辺地の葛原対月の寺に寄寓したり、浜民に帰って檀家の交渉したりする日々をすごす。

三月十九日

小坂の義兄田村叶から来信。姉の命日が先月の二十五日であった事、死因が肺結核であった事、法名が妙訪禅定女である事、漸やくわかった。ああ不幸な姉は遂に不幸の内に幼なき五人の子女を残して死んでしまったのだ。安心の日無き三十一年の尋命、人の世の盛りとはいふが、我が姉には百年の思ひがしたであろう。自分は、一生を不運に過した貧しい姉が終焉の時近き来る病床に横はり、度々の喀血に気力おとろへ、瘦せて蒼ざめて見る影もなき顔をあげて、枕辺に泣いて居並ぶ五人の子女を見廻はしたであろうその際の惨憺たる光景を明らかに心に描くに堪へぬ。況してその刹那の姉が心をどうして涙なく想像することが出来よう。息をひきとったのは午後八時半であったと、手紙に記されている。母は昨日この村の巫女の所に行つて、姉が亡魂を招ぎ吊らうた。

与謝野鉄幹からの、次の手紙を受信して。

「君の詩の次第にまどかに発展し行くは嬉しく候。御自重願上候。小生二月一日より病みつづけて今は大学病院の内科にあり、いつ癒ゆべきにや、今月中は退院も覚束なし、されど世縁未だ盡きずこの度は死なずと思し、御安堵被下度候。去年の今頃は芝居の稽古に余念なかりしに本年は高村君遠く遊び君は東京に在らず、小生は病む、

回想して君と高村君を思ふこと切なり。草々」ああ四月四日は何たる楽しき日であったろう。これらのなつかしきよりをえ、又「明星桜花号」も来た。数日悩まされていた空想を脱して平生の心にかへったのは、実にこの日である。……ああ自分は詩人として生れて来たのであったな、と思ふた時、余はただ涙も出る許りに心から嬉しく思ふのである。

村役場で「浜民村尋常高等小学校尋常科代用教師を命ず」という辞令をもらって。

……自分がこの度故山の静林に暫し隠家を求むるに当って、先ず第一に自分の心頭に起こったこの企てや、実は簡単ではないのである。で、転居の当坐から頼んで置いたのが愈々此度発令になった。無論自分はこれで一生を教壇の人となるといふのではない。或期間自分の時間をこの興味ある教育のために費して見たいといふだけであろう。……しかし彼らの前に立った時の自分の心は怪しくも抑へがたなき一種の感激に充たされるのであった。神の如く無垢なる五十幾名の少年少女の心は、これから全く我が一上一下する鞭につながれるのだと思ふと、自分はさながら聖いもの前に出た時の敬虔なる顫動を全身の脈管に波打たした。

四月二十一日

待ちに待った徴兵検査がいよいよこの日になった。学校をば欠勤。……身長五尺二寸二分、筋骨薄弱で丙種合格、徴集免除、豫て期したる事ながら、これで漸やく安心した。自分を初め徴集免除になったものが元気よく、合格者は頗る銷沈していた。……一家安心。

二十六日から高等科生徒の希望者へ放課後課外に英語教授を開始した。二時間及至三時間位つづけ様にやって生徒は少しも倦んだ風を見せぬ。

4月23日に浜民村で、竹田竹松39才が割腹自殺を遂げる。割腹後4時間。最後の1分まで平然と秩序正しく人々に遺言したという。このあと80日間、啄木の記事は途絶える。そして後に“八十日間の記”を書く。田植による小学校の農繁休業2週間のあいだに啄木は上京し、新詩社の同人達と会う。夏目漱石、島崎藤村の新一—それぞれ坊ちゃん、草枕、二百十日と破戒—に強い影響を受け、自分もいよいよ小説を書くのだと決心する。そして「雲は天才である」「面影」など書きあげる。一方“八円の月給で一家五人の糊口を支えるのは、至難なる事”と書いている。また小説の為のノートを書きとめている。

明治四十年（22才）

一月一日

……我が二十二才。父一禎が五十八才。母かつ子六十一才。妻せつ子、二十二才。妹みつ子二十才。子京子生後四日。と書く。

三月五日

朝早く母の呼ぶ声に目をさますと父上が居なくなったといふ。予は覚えず声を出して泣いた。父上が居なくなったのではなくて、貧といふ悪魔が父上を追ひ出したのであろう。暫くは起き上がる気力もなかったが、父上が法衣やら仏書やら、身のまはりの物を持っていかれたのだ。……ほとんど一ヶ年の間闘った宝徳寺問題が最期のきはに至って致命の打撃をうけた。今の場合、もはやその望みの綱がスッカリきれてしまったのだ。……されば父上は自分一人だけの糊口の方法もと、ついにこの仕末になったものであろう。予はかく思うて泣いた。泣いた。午後四時、せつ子と京ちゃんとは母者人に伴はれて盛岡から帰ってきた。妻の顔見ぬこと百余日、京子生れて六十日。今初めて我児を抱いたこの身の心はどうであろうか。二十二才の春、三月五日、父上が家出されたその日に、予は生れて初めて、父の心というものを知った。

「故郷」浜民へ居を定めて1年。啄木は浜民小学校の教員としての安定した生活と父の宝徳寺住職復帰と、徴兵検査を故郷でうけることを考えていた。浜民小学校の給与は一家五人が食べていけるほどではなく、また一部檀家の反対にあつて父の住職復帰は絶望となった。さらに妻節子がお産をして長女京子連れ帰る日に父が家出をする。これらのことが浜民村を脱出する決意につながつたと想像される。この年、妻子を盛岡へ帰し、母を知人宅にあずけ、函館に嫁いでいる次姉山本千三郎夫妻を頼って、妹光子とともに浜民村を出た。

IV 境遇への反抗

函館では代用教員の職を得ると同時に函館新聞の歌壇を担当するようになった。月給も20円くらいになったので、妻子と母を函館に呼んで新しい生活が始まった。函館には姉夫妻の他に新詩社の同人宮崎郁雨がいた。宮崎郁雨は啄木との親交が深く、のちに、節子の妹たか子と結婚することになる。宮崎郁雨は金田一京助、土岐哀果(善磨)とともに、啄木の晩年を支えた。函館に来て約4ヶ月後の8月下旬に函館の大火があり、新聞社も小学校も焼けてしまった。札幌市の北門新聞社の小国善平(露堂)の世話で、小樽日報の創業に参加する。創業時代の忙しさは格別で寝食を忘れるほどであったが社内内の紛にまきこまれ、小林事務長に頭をなぐられる。この事件で辞表を出して退社する。すぐ釧路新聞への入社が決定し、釧路に単身赴任する。ここでは編集長として活躍するが

約3ヶ月で辞職して上京し、執筆活動に入ることになる。浜民村での生活は餓死線上のものであった(金田一京助)のに比較すれば、はるかに改善されたのであるが、新聞人としての生活よりも、中央文壇での活躍を胸に期して、釧路での生活を捨てる。北海道時代はのちに啄木が自ら語るように「境遇への反抗」であったといえる。以下「忘れがたき人々」¹⁾より引用。

わがあとを追ひきて
知れる人もなき
辺土に住みし母と妻かな

かなしきは小樽の町よ
歌ふことなき人人の
声の荒さよ

いささかの銭かりてゆきし
わが友の
後姿の肩の雪かな

樺太に入りて
新しき宗教を創めむといふ
友なりしかな

共同の薬屋開き
儲けむといふ友なりき
詐欺せしといふ

あをじろき頬に涙を光らせて
死をば語りき
若き商人

啄木の交友が、さまざまであったことが知れる。それぞれの人が極限状態に近いような迫力がある。

今夜こそ思ふ存分泣いてみむと
泊りし宿の
茶のぬるさかな

泣くことは啄木の精神の純化であり、安らぎであったようだ。

さいはての駅に下り立ち

雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき

しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

小奴といひし女の
やはらかき
耳朶なども忘れがたかり

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の右手のあたたかさかな

死にたくはないかと言へば
これを見よと
咽喉の瘻を見せし女かな

郷里にゐて
身投げせしことありといふ
女の三味にうたへるゆふべ

釧路では酒場に入って、酒を飲むようになった。そして一緒に酒を飲む芸者や酒場の女たちの境遇はさらに悲しく、一度は死にかけて女達ばかりのようだ。誰も彼もが貧困な周囲の様子が理解される。当時の日本は国防費が国家予算の50%を越える状態で日清、日露と2つの戦争を戦ったのだから、貧乏だったのは当然であろう。「救民論」²⁾の中で小野梓は明治の世相を次のように画いている。

……人類日に滋り、風俗月に移るにおよんで、始めて強は弱を凌ぎ大は小を辱むるの幣生じ、生民之れが為に殆ど生命を保つ能わざるに至る。……惜しいかな後世姦雄の徒、政府を以て己が私欲の具となし、生殺与奪其の権を専らにして、公儀に出でず。生民の窮因は日は一日よりも甚しく、唯だ政府の暴威を畏れて、左視右顧、其の忿怒を避くるのみ、たまたま、良政府と称する者有りといへども一隅に画せられて、なほ未だ弱小を凌辱する幣有るを免れず…… (救民論、小野梓)²⁾

……そうして一つ処にいて段々そこから動かれなくなるような気がして来ると、私はほとんど何の理由なしに自分で自分の境遇その物に非常な力を出して反抗を企てた。その反抗は常に私に不利な結果をもたらした。郷里から函館へ、函館から札幌へ、札幌から小樽へ、小樽か

ら釧路へ—私はそういう風に食をもとめて流れ歩いた。
…… (食うべき詩, 石川啄木)⁸⁾

……釧路は寒い処であった。然り、唯寒い処であった。時は一月末、雪と氷に埋もれて、川さえ大方姿を隠した北海道を西から東に横断して、着いてみると、華氏零下二十一三十度という空気も凍たような朝が毎日続いた。氷った天、氷った土。一夜の暴風雪に家々の軒下の全く塞った様も見た。広く寒い港内には何処からともなく流水が集って来て、何日も何日も一船も動かず波も立たぬ日があった。私は生れて初めて酒を飲んだ。

(食うべき詩, 石川啄木)⁹⁾

……遂に、あの生活の根調のあからさまに露出した北方植民地の人情は、甚しく私の弱い心を傷けた。四百噸足らずの襤褸船に乗って、私は釧路の港を出た。そうして東京に帰って来た。

帰ってきた私は以前の私ではなかった如く、東京もまた以前の東京ではなかった。帰って来て私はまず、新しい運動に同情を持っていない人の意外に多いのを見て驚いた。というよりは一種の哀傷の念に打たれた。私は退いて考えてみた。然し私が雪の中から抱いて来た考えは、漠然とした幼稚なものではあったが、間違っているとは、思えなかった。そうしてその人達の態度には、ちょうど私自信が口語詩の試みに対して持った心持に似た点があるのを発見した時、卒然として私は自分自信の卑怯に裂しい反感を感じた、この反感の反感から、私は未だ未成品であった為に色々の批議を免れなかった口語詩に対して、人以上に同情を有つ様になった。

……その間に私は四五百の短歌を作った。短歌を作るという事は言うまでもなく叙上の心持と齟齬している。

然しそれには又それ相応の理由があった。私は小説を書きたかった。否、書くつもりであった。又実際書いてもみた。そうして遂に書けなかった。その時、ちょうど夫婦喧嘩をして妻に敗けた夫が、理由もなく子供を叱ったり、虐めたりするような一種の快感を、私は勝手気儘に短歌という一つの詩形を虐使する事に発見した。

……やがて一年間の苦しい努力の全く空しかった事を認めねばならぬ日が来た。自分で自分を自殺し得る男とはどうしても信じかねながら、もし万一死ぬことが出来たなら……という様な事を考えて、あの森川町の下宿屋の一室で、友人の剃刀を持って来て夜半潜かに幾度となく胸にあててみた……ような日が二月も三月も続いた。

そうしている間に、一時脱れていた重い責任が、否応なしに再び私の肩に懸って来た。色々の事件が相ついで起った。「遂にドン底に落ちた」こういう言葉を心の底か

ら言わねばならぬような事になった。と同時に、ふと、今まで笑っていたような事柄がすべて、急に、笑う事が出来なくなったような心持になった。

そうしてこの現在の心持は、新らしい詩の真の精神を、初めて私に味わせた。 (食うべき詩, 石川啄木)⁹⁾

釧路新聞での成功にもかかわらず、また安定した生活が得られそうであったにもかかわらず、なぜ石川啄木が北海道を脱出して東京に戻ったのか？ 明星を主宰する与謝野鉄幹から上京してくれるよう依頼があった。明星の発行部数は1200から800と減り、与謝野の活動は沈滞していた。晶子の歌や講演など、晶子が明星の財政を1人でまかっていた。この事は上京してはじめて啄木に晶子から知らされる。鉄幹は自分も小説を書いては挫折していた。啄木も同様に小説を書いて、挫折した。—これは二回も三回も床屋の剃刀を胸に当てて死のうと思いつめるほど、くやしいものだった。なぜ2人の有能な詩人の関心が小説に向いたのか？ それは新しい自然主義文学の台頭であった。森鷗外、夏目漱石、島崎藤村、正宗白鳥、国木田独歩、徳田秋声、永井荷風らの作品が発表されたことである。

上京して1年の間、啄木は必死で小説を書き続ける。「病院の窓」「母」「天鷲絨」「二筋の血」などを書き上げて鷗外に見てもらったり、金田一京助に見てもらって、中央公論社に持って行ってもらったりする。そうしながらある時には二晩で250首もの歌を作る。その間、煙草代がなくて質屋に行ったり、原稿用紙がなかったりの極貧の生活を続けている。妻子は函館の宮崎郁雨宅に置いてある。郁雨は妻節子の妹と結婚したので、義弟になっていた。郁雨の結婚に当って、啄木の実妹光子を是非と勧めたのが啄木の母カツであり、啄木は節子の妹たか子を勧めた。郁雨はたか子と結婚したのであるが、それがカツと節子の間柄を決定的に破壊した。文中の「重い責任」とは、函館から妻子と母と呼び野辺地から父を呼んで東京で一家で暮すことである。文中の「色々の事件」とは、娘京子のジフテリア、川上眉山の剃刀自殺、独歩の急死、「明星」の廃刊、「スバル」の創刊とその編集などである。この年は金田一京助が啄木を援助すること大であった。金田一京助も、煙草代、銭湯代に事欠く日がありながら、本を売ったり、質屋を利用したり、下宿代をとどこうらせながら、啄木を援助していたようだ。金田一京助は盛岡中学の2級先輩である。金田一京助にとっては、石川啄木は中学時代から文学の仲間であった。—この頃及川古志郎(後の連合艦隊司令長官)が啄木に文学の手ほどきをする。新詩社の同人、金田一京助が「明星」を紹介する。新詩社同人の国語教師大井蒼悟が盛岡中学に赴任する。—など金田一京助と石川啄木の友情は「郷里」盛岡中学での強力な結びつきであるし、京助は啄木の和歌が郷里の誰を歌ったものであるかも、1つ1つわかっているほどに啄木の詩作を熟知し、生涯の友となった⁹⁾。

V おわりに

本項は石川啄木試論の一部として「郷里」という概念を取りあげた。「郷里」は石川啄木の意識を揺がす最も大きいエネルギーであったし、「内部生命の全て」と自ら定義したこともあった。そこで石川啄木の「郷里」を形作った少年時代の日記—といっても、早熟な文学者の作品—からはるかな明治時代の盛岡中学の人々を再現し、啄木の思索の跡をたどった。啄木にとって「郷里」と「郷里からの脱出」は二律反背である。「郷里」への切ない甘美な想いと、郷里から「石もて追われた」実感とが「悲しみ」の感情で結実する。近代詩の巨星ともいえる啄木の一面である。餓死線上の生活を続けながら、明治後期の文学を支えていた啄木の晩年については触れることができなかった。また思想家としての身をけずるような思索も啄木の死を早めたのであるが、それについても言及できなかった。いずれも別項としたい。

本項を畏友永瀬博忠氏に捧げる。永瀬は病室で今年の秋韻を聞いただろうか？ 学問を愛し、明治の思想家を尊び、貧しく辛い人達の絶対的な理解者であった。永瀬は人生のモラル、経済のモラルを体現している学者であった。偉大なかくも偉大な現代の思想家を失った事が、日本の貧しく辛い人達の健全な労働意欲を落胆させ荒廃させることにならぬよう祈るばかりである。頑強な

岩盤のような理解者として、崩れゆくモラルを支えていた永瀬の姿は、啄木の姿と同じように極貧に耐えながら時代の要請にこたえている懸命な姿であった。落涙を禁じえない。

文 献

- 1) 石川啄木 (1907) 忘れがたき人々. 一握の砂. 悲しき玩具, 新潮文庫, 91-118. (平成3年)
- 2) 石川啄木 (1902) 秋韻笛語. 石川啄木集, 講談社, 119-134. (昭和39年)
- 3) 遊座昭吾 (1971) 啄木と渋民, 八重岳書房 (昭和46年)
- 4) 石川啄木 (1904) 啄木庵日誌. 石川啄木集, 講談社, 134-153. (昭和39年)
- 5) 石川啄木 (1906) 渋民日記, 石川啄木集, 講談社, 153-194. (昭和39年)
- 6) 石川啄木 (1907) 明治四十丁未歳日誌. 石川啄木集, 講談社, 194-209. (昭和39年)
- 7) 小野梓 (1870) 救民論. 明治思想集 I, 筑摩書房, 179-180. (昭和41年)
- 8) 石川啄木 (1909) 食うべき詩. 石川啄木集, 講談社, 90-95. (昭和39年)
- 9) 金田一京助 (1952) 「一握の砂, 悲しき玩具」解説. 講談社, 418-423. (平成3年)

Abstract

An essay on Ishikawa-Takuboku I
—The significance and influence of one's native land—

Hiroaki Nagasaki

A literary activity of Ishikawa-Takuboku had begun at his seventeen and finished at his twenty seven. Japanese word "Furusato" that contains the meaning of one's native land and people is the most effective energy to move his consciousness, and that was described "all of my internal life" by himself. In a poet of Ishikawa-Takuboku we can find a consciousness -a sense and thinking- of young people in Meiji-era about 100 years ago. "Furusato" is sweet and beautiful nature and people for him, and also it is a memory of ill-treat people who had kicked his father out of his home temple. An eager desire for successful fame in his literary activity and a sadness in Meiji-era can be imagined by hundreds of his poem and his early days' diary.